

平成29年度
ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI
(研究成果の社会還元・普及事業)
実 施 報 告 書

HT29109 岩絵の具入門～日本画の画材で自分の色を作ろう！～



開 催 日： 平成 29 年 10 月 7 日(土)

実 施 機 関： 多摩美術大学

(実施場所) (八王子キャンパス)

実施代表者： 菊地 武彦

(所属・職名) (美術学部・教授)

受 講 生： 中学生 1 名・高校生 14 名

関 連 URL:

【実施内容】

受講生に分かりやすく研究成果を伝えるために、また受講生に自ら活発な活動をさせるためにプログラムを留意、工夫した点

受講生にとって、絵を描く際、市販の絵の具を使用することが通常であろう。しかし、元来、絵画とは身近な材料を工夫して色材とし、利用してきた。本プログラムでは、受講生がこれまでに日本の美術教育の授業で実際に触れたことが無いであろう日本画の技法や画材を用いた絵の具作成・絵画作成を通して、身の回りにあるものの画材への転用の可能性や自分だけのオリジナルを作る喜び、絵画として表現する楽しさを体験してもらった。

プログラムは講義、実習、発表・講評会の3段階に区切り、コミュニケーションを伴う体験型のものを企画し、受講生の興味や集中力が途切れないように心がけた。また、実施協力者に日本画を専攻する大学院生を配置し、受講生が親しみやすい雰囲気づくり・サポート体制の整備を行った。(※当初、受講対象者を高校生としていたが、中学生からの受講希望があった為、実施協力者の配置に配慮した。)

なお、当日は急なキャンセルにより、15名での実施となった。

●講義

講義「日本画入門」では、鉱物見本を見せながらの絵の具の成り立ちを講義し、物質と絵の具の関係、色彩とイメージとの関係などへの理解が深められるようにした。また本研究のあらましも併せて講義し、現代における画材の意味の考察を行った。また、講師による一方的な教授とならないよう、質問形式を用い、受講生の参加を促した。

●キャンパスツアー

午後の実習で使用する土の採取を兼ねた、大学の絵画制作現場のキャンパスツアーを設定した。実施代表者及び実際に日本画を制作している大学院生(実施協力者)が制作の様子や画材・技術等の説明を行い、午後の実習への興味と理解を深められるように努めた。

●実習

実習①: 採集した土を用いた絵の具作成。身近な物質がどう絵の具に変容するのか体験してもらった。また人が手を加える(焼く、細かく砕くなど)ことにより少ない色数でいかに色相のバリエーションを出してきたか、体験してもらい、受講生の身近なものでオリジナルの絵の具が作成できる楽しさを伝えた。

実習②: 自作の絵の具や産業マテリアルで作られた混色可能な岩絵の具を用いて、自由な絵画表現にチャレンジしてもらった。

●発表・講評会

講評会：冒頭に完成作品の展示を行う。講評会では、受講生がオリジナル作品づくりをととして得た発見や気づきを言語化し、他者と共有することによって更なる気づきを即し、思考を深めていけるようにサポート等を行った。

当日のスケジュール

- 9:30-10:00 受付(集合場所：多摩美術大学八王子キャンパス 絵画北棟3階)
- 10:00-10:20 開講式(挨拶、オリエンテーション、科研費の説明、受講生の自己紹介)
- 10:20-11:00 講義「日本画入門～絵の具という物質～(講師：菊地 武彦)」
(※日本画の制作方法や画材等の紹介説明)
- 11:00-11:10 休憩
- 11:10-12:00 キャンパスツアー(※日本画の制作現場の見学、午後の実習に使用する土の採取)
- 12:00-13:00 昼食・休憩
- 13:00-14:00 実習①「身近にあるもので絵の具作成」
(※作成した顔料で色見本作成、及び採取した土を使って絵の具作成)
- 14:00-14:10 休憩
- 14:10-15:20 実習②「オリジナル画材をつかって、日本画家になってみよう！」
(※産業マテリアルに色づけしたものを使い、色紙制作)
- 15:20-15:40 クッキータイム
- 15:40-16:00 作品の展示、講評会
- 16:00-16:20 修了式(アンケートの記入、未来博士の授与)
- 16:20 終了・解散

実施の様子



1. 講義：「日本画入門～絵の具という物質～」



2. 材料探し(土の採取)／キャンパスツアー



3. 実習①：採取した土をふるいにかけて、細かくする



4. 実習①：熱処理、色の変化の確認



5. 実習①: 熱した土を細かくする



6. 実習①: 顔料を加えて、お気に入りの色作成



7. 実習②: オリジナル絵の具を使って作品制作



8. 作品の展示・講評会

事務局との協力体制

- ・研究支援部が振興会への連絡調整と、提出書類の確認・修正等を行った。
- ・経理部及び研究支援部が委託経費の管理と支出報告書の確認を行った。
- ・広報活動は、実施者、研究支援部、総合企画室、入試広報課が協力して本事業について PR を行った。
- ・研究支援部が本事業の当日の写真撮影を行った。

広報活動

- ・総合企画室(大学ホームページ、SNS 発信等)、研究支援部(SNS 発信、公共施設・学校・マスコミ等へのチラシ等の配布・連絡、大学で開催のイベント等でのチラシ配布)、入試広報課(大学で開催のイベント等でのチラシ配布)、実施者が協力して近隣の教育委員会、中学・高校、美術系専科を持つ高校、美術系予備校、マスコミ等へのチラシ配布や連絡を取り、受講生募集の広報活動を行った。
- ・オープンキャンパス(7 月)・高大連携授業等の多数の来場者があるイベントでは、受講対象学年の生徒や学校関係者をメインに直接、本事業について PR をおこなった。

安全配慮

- ・実習の安全確保の為、受講生 3 人に対して 1 人の割合で実施協力者(大学院生)を配置した。
- ・不慮の事故等の対策の為、実施協力者(大学院生)は、本プログラムで行う内容の経験者をお願いし、事前に打ち合わせやシミュレーション等を行った。
- ・受講生、実施協力者(大学院生・講師)については、短期のレクリエーション保険に加入を行った。(その他の実施者については、大学にて加入の保険を適用。)
- ・受講生の食事については、アレルギー等について、事前に本人・保護者に確認し、配慮を行った。
- ・参加者の事故、怪我、体調不良等の対応として、大学保健室と協力体制を整えた。
- ・材料として土を利用する為、手洗い・うがい等の衛生面を徹底した。(※特に食事時には注意を喚起した。)

・実施前に、受講生・保護者に対し、本プログラムの概要や、実施時の写真撮影等の説明書類を送付し、予め同意を得た。

今後の発展性、課題

今回のプログラム全般に対しては、受講生に興味を持ってもらうことができ、アンケート結果からも成功したと感じているが、1日のカリキュラムとしてはやるべき内容が多かったこと、当日の天候を考慮していなかったことが反省点である。

プログラム当日の午前中は雨天であり、幸い土を採集する時間には止んでいたが、雨天の想定をしていなかった為、土に粘り気が出てしまい、絵の具にするための工程であるふるいがけに苦労した。

内容の多寡に関しては、講義、絵の具作成、制作など多岐にわたり体験してもらえたが、その分、細部には踏み込むことが出来なかったと感じている。また、採取した土を画面に塗ってから次の工程(採取したモチーフを描く)までの時間が不足し、画面が完全に乾いていなかった受講生もいた。これらを解決するためには時間配分の再考や、項目を少なくしひとつのカリキュラムに時間を取るなどの対策が必要であったかも知れない。

募集期間と開催日については、募集期間が夏休みと重なってしまったこと、また開催日が3連休の初日であったこと、高校のテスト期間を考慮していなかったことから、開催日はもっと注意深く決定する必要があった。

今後の発展性については、日本画の技法は幅が広いので、さまざまな切り口から考察して、絵画と科学技術を結びつける講座や、伝統の中の革新的な研究の紹介、描くことの楽しさを体験できる講座など多くの実習をおこなうことが可能だろう。

【実施分担者】

山嵯 雷蔵 美術学部・助手

【実施協力者】 9 名

【事務担当者】

佐々木 絵美 研究支援部 研究支援課・主事